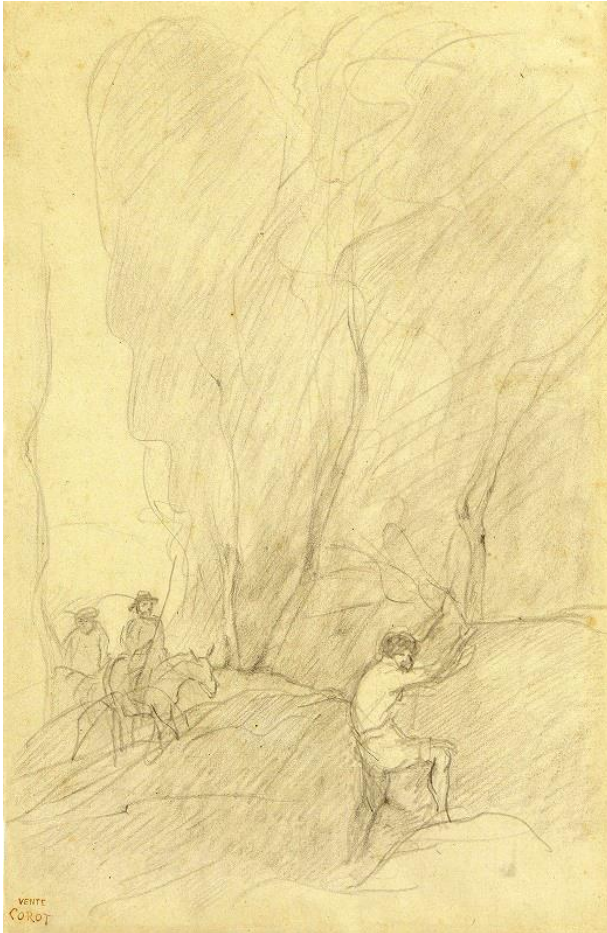


Jean-Baptiste Camille Corot

ジャン＝バティスト・カミーユ・コロー (1796-1875)



作品名 風景

種類 紙に鉛筆

サイズ 43.5×28.3cm

略 歴

パリの裕福な家庭に生まれ、19世紀の4分の3を生き、新古典主義的、ロマン主義的、写実主義的、印象主義的と呼ばれ19世紀フランス美術の特徴を全て持ち合わせ、次世代の印象派との橋渡しをした画家である。

詩情あふれる森や湖の風景画で知られるが、『真珠の女』のような人物画にも傑作がある。

1825年から計3度イタリアへ旅行し、イタリア絵画の明るい光と色彩にも影響を受けている。理想化された風景でなく、イタリアやフランス各地のありふれた風景を詩情ゆたかに描き出す手法はのちの印象派の画家たちにも影響を与えた。1855年の頃より現実と幻想が銀灰色の霧の中で交錯、甘美なノスタルジーを醸し出している作品を発表し始めて1864年のモルトフォンテーヌの思い出の作品の発表にと思い出と言う内的な世界を導入し、風景をより生き生きと蘇らせて人間の係り合いを強く感じさせる作品にしている。このように、コローはクールベを頂点とするレアリストの画家達が脚光を浴び、同時代の画家達が戸外で描くことに熱中している時期にコローはあたかも次の時代の画家達の出現を予告するかの様に、思い出の世界を絵画の世界に持ち込んで行ったのである。

1822年古典的風景画家ミシャロン、ベルダンについて学ぶ。

1825年最初のイタリア旅行をする

1827年サロンに初出品

1828年イタリアより帰国

1829年ノルマンディ・ブルターニュ・フォンテーヌブローに滞在

1831年サロンで二等賞

1834年二回目のイタリア旅行

1836年ラヴィエと共にオーヴェルニュに滞在している

1846年レジオン・ドヌール勲章を受けた

1848年サロンの審査委員に選出される

1855年パリ万国博覧会大美術展で作品6点出品。一等賞を獲得

1864年モントホンテーヌの思い出を発表 現在、ルーブル美術館所蔵

この作品はコローの夢幻的な作品の中でも最も優れた作品

1873年フォンテーヌブローに最後の滞在

1875年ミレーの死の一ヶ月後に他界